

CHI2008 参加報告

福嶋政期, 梶本裕之

電気通信大学 人間コミュニケーション学専攻

概要

2008年4月5日から10日の6日間、ACM SIGCHIが主催する国際会議CHI2008 (Conference on Human Factor in Computing Systems)が開催された。CHIはHuman-Computer Interactionに関する最高峰の国際会議である。今年は、ルネサンス発祥の地として名高いイタリアのフィレンツェで開催された。フィレンツェは、町の至る所に美術館、教会、石像等があり、また、屋根は赤褐色で統一されており、町全体が一つの美術館のようであった。会場は、「バツ要塞」(図1)と呼ばれる五角形の大建築物であった。

今年の参加登着数は約2300人であった。会議内容の統計は以下通りである。全採択数は582件(全投稿数1969,採択率29.56%)、論文発表は157件(投稿件数714件,採択率22%)、ショートトーク61件(投稿件数341件,採択率18%)であった。なお、全投稿件数はこれまでで最多であった。



図1 CHI会場(バツ要塞)

6日間のうち初めの2日間はプリカンファレンス(Workshops, Doctoral Consortium等)であり、残り4日間はテクニカルプログラムであった。会議初日にはIrene McAra-McWilliam氏によるOpening Plenary、また、最終日には、Bill Boxtton氏によるClosing Plenaryが行われた。会議は、毎日朝にその日のセッションの発表者が30秒で自分の発表の広告を行うCHI Madnessというイベントが行われた。その後はPapers/Notes, Case studies, Panel等に加え、デモ展示、企業展示、ポスター発表なども平行して行われた。筆者にとって初めての国際学会であったこともあり、休み時間の間は常にプログラムと睨みあっていた。

また、3日目の夜はMicrosoft, Google等のHospitality Events(図2)が行われた。イベント会場内は多くの人で溢れかえっていた。個人的な話で恐縮であるが著者はMicrosoftのイベントでの抽選でZune(80GB)を頂いてしまった。



図2 Hospitality Eventsの様子

今年、ベストペーパー7件、ベストノート3件が選ばれた(プログラムの24ページに記載されている。<http://www.chi2008.org/program.html>)。

発表紹介

今年のテーマは”art, science, balance”であったこともあり、発表内容は多岐に渡っていた。以下では、テクニカルプログラムにて著者が特に興味深いと感じた3件の発表について述べる。

一つ目は、Thorsten Karrer (RWTH Aachen University) らによる DRAGON: A Direct Manipulation Interface for Frame-Accurate In-Scene for Video Navigation であった。<http://hci.rwth-aachen.de/dragon> : デモビデオが閲覧できる。)。従来、PC等で映像を再生する際、映像の枠外に表示されたタイムライン上のバーをドラッグしてコマ送りを行っていたが、この研究は、映像中のコンテンツ(物や人物)が動いた軌跡が記憶しているので、映像のコマ送りを映像中のコンテンツをドラッグすることで実現できる。

二つ目は、Seoktae Kim(KAIST)らによる Inflatable Mouse: Volume-adjustable Mouse with Air-pressure-sensitive Input and Haptic Feedbackである。従来の携帯型マウスは、小さすぎて使いづらい。そこでこの研究では、携帯時は平らな板で、使用時は中の風船によって膨らむマウスを開発した。風船を用いているので圧力を用いたインタラクションを行えるので従来のマウスとは異なる操作感が得られる。

三つ目は David Merrill(MIT)らによる The Sound of Touch: Physical Manipulation of Digital Soundである。杖型デバイスを用いて様々なテクスチャの音を合成できるものである。マイクとピエゾセンサが組み込まれた杖型のデバイスを用いて物質の表面のテクスチャの録音と再生を

実現している。

Student Research Competition

筆者はStudent Research Competition(SRC)に参加した。筆者自身が参加したものである。特に紹介する。今年、SRCの発表件数は22件(投稿件数は71件、採択率30%)であった。SRCは学生がundergraduate, graduateのグループに分かれ、研究発表のコンテストを行うものである。CHI2007から始まり、今年で2回目を数える。今年、テクニカルプログラムの初日にポスター発表を行った、そこで審査が行われ、それぞれのグループから3人ずつ選ばれた。最終日、選ばれた6人は、CHI Madnessで発表を行い、その後、ショートプレゼンテーション(10分発表・5分質問)を行った。勝者には賞金が贈られた。



図 3 SRC 参加者の集合写真

感想

CHI2008は著者にとって初めての国際会議であったと同時に、初めてのヨーロッパであった。会議を通して様々な刺激を受けたと同時に、開催地の食、人、空気、すべてから刺激を受けた。色々情報がありすぎて頭が混乱しているが、少しずつ整理して今後の研究と生活に生かしていきたい。

来年はアメリカのボストンで開催される。テーマはdigital life in new worldである。